当院の感染対策

もも整形外科

このコロナ禍の2年間で、感染との付き合い方がいろいろとわかってきたと思います。

当院では、ただのパフォーマンスになるような感染対策ではなく、より現実的な対策を心がけています。

例えば、入口での顔や手での検温には、疑問を感じている方も多いと思います。「34度です。OKです。」などという、そんな体温でいいわけがないという非常識なことも少なくありません。

大阪大学医学部附属病院　感染制御学　教授　忽那賢志先生が「施設の入口での検温が有効か」というコラムを載せておられました。

このコラムをまとめると

- 顔面などの温度は被検者からセンサーまでの距離、気温、湿度などに影響を受ける
- 人の体温は1日の中で変化する
- 新型コロナ患者の半分以上は熱がない
- 「38度以上」を指標にした場合、コロナ患者の83%を見逃す

以上から、当院では感染対策の考え方を

①　症状のある方は自粛していただくという考えはすでに周知されている。

②　症状のない方からの感染が多い。

③　ウイルスはコロナに限らず見えないが必ず存在している。

という観点とし、

「ウイルスがいてもうつらない、うつさない」ことを徹底します。

換気

厚生労働省「換気の悪い密閉空間を改善するための換気の方法」
必要な換気量は30㎥/1時間

この2年間、窓を開ける換気で、寒い、暑いを仕方ないとして過ごしてきたと思います。その辺をなるべく軽減して、効率よく換気させるいくつかの工夫を考えました。

- シーリングファン
- 空気清浄機:ウイルス99.9%除去、医療従事者が選ぶ空気清浄機№1
- サーキュレーター:触媒フィルター・オゾン生成ユニットを搭載することで空間除菌を可能にしたサーキュレーター

手指の消毒

われわれは「一処置一手洗い」と教育されてきました。何か処置したら手洗いして次の方に菌をうつさないためです。ただ、コロナを経て、これに疑問を感じました。われわれがパソコンなどを触った手で、処置の前に手洗いはなく、処置の後に手を洗ってまたパソコンなどを触る。これは患者様の側になってみたら、「その手で自分を触るの？」「それで自分を触ったあとは手を洗うの？」ということになります。当院では、患者様に触る前にも後にも手指消毒・手洗いを心がけます。また、待合室にも多くの消毒液を用意しましたので、皆様にもこまめな消毒を心がけていただければ幸いです。

レイアウト

待合室では、患者様同士がなるべく向かい合わない配置を意識いたしました。飲食店で同じグループで座っても真ん中に仕切りがあるということに、仕方ないとわかっていても辟易している方も多いと思います。当院では、一人掛けの椅子を多くし、植栽などをパーティション代わりとして配置するなどで、感染防止を考慮しながらも、なるべく仕切りでの圧迫感のない状態でリラックスしてお待ちいただくことを心がけています。

直接の接触の少ない問診、会計

問診は可能な方はご自身のスマホなどでできるようにしました。これにより、ペンや問診板といった使い回すものを少なくします。また、お会計でのお金のやりとりでの接触を減らすために、患者様側ではただお金を挿入するのみというシステムにしております。ただし、自動精算などではご自身でタッチする場面が多いため、これは現在の感染状況には不合理と考え、金額の提示は事務が行い、挿入のみ患者様側でやっていただくようにしました。

診察ベッド、椅子、リハビリ器具などの清拭

これは当然のことですが、皆様が快適に過ごせるよう、こまめな清拭を心がけております。待ち時間に隣の椅子の清拭などでややお邪魔することもあるかもしれませんが、ご理解いただけると幸いです。

もともと院長がやや潔癖症

新型コロナウイルスの流行に関係なく、もとより院長が潔癖症の傾向があり、日本一、手を洗うドクター（自己申告）だと思っています。新型コロナの流行前から清潔には敏感でしたので、終息後も清潔なクリニックを継続していきます。